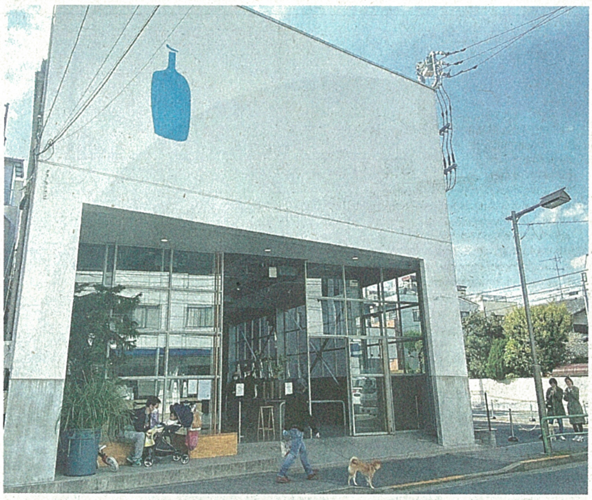
探訪 新ライフスタイル

東京・清澄白河の街の魅力

新旧融合が生む適度な距離

東京都江東区の清澄白河駅は、隅田川と荒川に挟まれた深川地区にある。1995年、木場公園に日本を代表する現代アートの拠点、東京都現代美術館（MOT）が開業したのをきっかけに駅から木場公園までの間がオシャレな街区に変貌した。

もともとこのエリアには40を超える寺院が点在することで「深川の寺町」と呼ばれ、お寺と小ぶりな店舗、住宅、町工場、倉庫、事務所、公園が同居した下町だった。MOTが呼び水となり、周辺の倉庫や住宅、事務所がリノベーションされ、ギャラリー、生活雑貨、カフェ、ベーカリーといった小商いが集積していった。



ブルーボトルコーヒーの清澄白河フラッグシップカフェ（東京都江東区）

大きな変化が起きたのは、2015年に米サンフランシスコのサードウエーブコーヒー店のブルーボトルコーヒー第1号店の出店だ。出店で注目度が上昇し、「アート・カフェ」の街と呼ばれるようになった。昨今は大型マンションや外国人も住む大きなシェアパートもできるなど、ミレニアル世代や子育て世代からも住みたい街として熱い視線が送られている。

清澄白河が住んでみたい街となったのは、アートやカフェの街として伝わったことが大きいが、その芯にあるのは〝デザインとライフスタイルの融合〟ではないだろうか。そもそもデザインのデは取り除くこと、サインは目にする、形にすること。つまり余計なものを取り除いてできた形がデザインである。清澄白河は寺町や運河物流の倉庫や町工場の古い良さや記憶を守りながら、今の時代のライフスタイルに合うよう〝デザイン〟されている。

その融合が旧住民と新住民、住民と来訪者の間に、程よい距離を保つ「人とマチのソーシャルディスタンス」をつくっている。街歩きやカフェに訪れる来訪者は、しっとりとした空気を壊さないよう過ごすのは、身の丈にあった日々を暮らす住民との間合いを保っているようだ。その光景は大勢の都市観光客が集まる谷根千と呼ばれる谷中・根津・千駄木と異なる。

18年、築40年の製本所をリノベーションした保存食専門店、HOZON。新潟県佐渡島で育った食材を瓶詰めにした保存食、丁寧に作り上げられた手作りサンドイッチ、ドリンク、総菜のほか、佐渡から取り寄せた食品が並ぶ。女性店主に出店の理由を問うと「キッチン工房が併設できるスペースの確保と家賃と街との折り合い」と語った。保存食を食文化として捉えてくれる街だからだろう。

新型コロナウイルスの感染拡大による緊急事態宣言下でのブルーボトルはテークアウトのみだが、すっかり清澄白河に溶け込み、訪れる人は店内と街のソーシャルディスタンスを保っていた。街に似合うお店と人とにより、知り合い、親しくなり、近隣同士による相互扶助ができていく。清澄白河ライフにはソーシャルメディアでつながりすぎた人間関係の窮屈さを取り除く、程よい距離の暮らしがある。

（商い創造研究所代表　松本大地）